



現代の文学 = 35

水上 勉 集



高瀬川

銀の庭

鴉の穴

越後つついし親不知

四陣の蝶

霧と影

河出書房新社

現代の文学 35 水上 勉集

勉

© 1964

責任編集

川端康成 丹羽文雄  
円地文子 井上靖  
松本清張 三島由紀夫

---

昭和39年6月1日 初版印刷  
昭和39年6月8日 初版発行

定価 390円

著 者 水 上 勉  
発 行 者 河 出 孝 雄  
印 刷 者 高 橋 武 夫  
装 幀 原弘(N. D. C)

印刷・大日本印刷株式会社  
本文用紙・本州製紙株式会社  
函 貼・神崎製紙(ミラーコート)  
同 納 入・東 邦 紙 業 株 式 会 社  
クローズ・日本クロス工業株式会社  
同 納 入・株式会社小島洋紙店

発 行 所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社  
神田小川町三ノ入

電話東京 (291) 3721~7  
振替口座 東京 10802

---

製本・小高製本

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

|           |     |
|-----------|-----|
| 高瀬川       | 三   |
| 銀の庭       | 一九  |
| 鴉の穴       | 二六  |
| 越後つっいし親不知 | 三五  |
| 西陣の蝶      | 三六一 |
| 霧と影       | 三五三 |

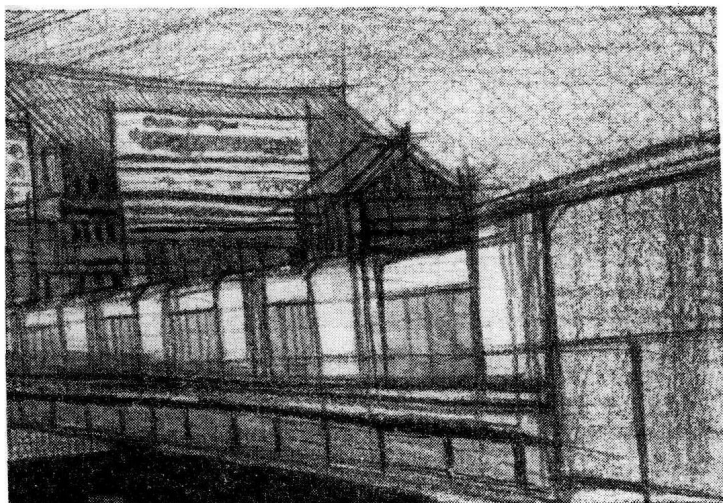




水上勉集

高  
瀬  
川

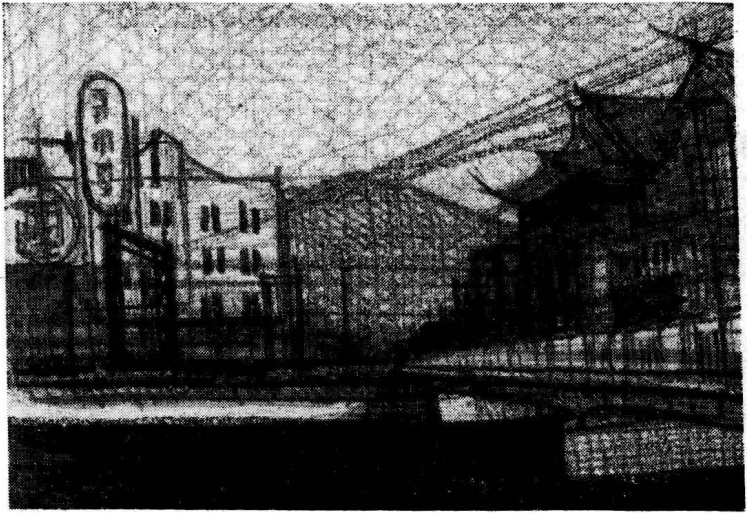




1

鴨川土堤の桜の散る四月半ばから、今年は風のひどい日がつづいた。毎年、五月に入ると、お兼の家の前を流れる高瀬川の岸で、柳の新芽がふき出すのだけれども、今年は例年よりおそくて小指の先ほどのみどり葉が少しばかり見えるだけである。朝夕が、底冷えするように寒い。めずらしい年といえた。お兼はいつもなら、仏間の障子を貼るかえたり、冬のうちだけ敷くことにしているみせの間のつづれの敷物も、厨子の二階の物置へあげてしまふ習慣だった。けれども今年はまだ、何となく、それが億劫な気がして、奥座敷のまん中で、麻柄の絹布団をかけ放しにしている電気炬燵も、スイッチを切ったことがない。一日じゅう、孫のみどりと布団に足を入れたまま、うとうとしている日が多い。

高瀬川に沿うた木屋町筋も、たまにみどりの手をひいて出してみるが、一日一日町の眺めはかわってきていた。四条までと思っていたバアや料亭の看板は、もう仏光寺



あたりまで軒なみ増えてきているし、夕方になると、赤青のネオンに灯がともって、通りがざわつてくる。いまに、お兼のいる高辻のあたりまで、町の色どりは攻めよせてくるにちがいないと、姉娘の由枝が脅かすのだけれども、それでもまだ、高辻のあたりはひっそりしているのだった。川べりは一だん高くなつた岸になっていて、古い柳が三間置きぐらいに植っている。底の浅い高瀬川の、藻のういた水面に柳は届きそうなほどの枝をたわめていた。片側は格子の表をみせた人家である。どの家も似たような町家で、たまには、駒よせとよばれる犬垣をめぐらせたり、放射線状のしのびがえしのある棧瓦の家なども建っているけれど、軒なみどの家も、ひっそりしていて音もしない。

お兼の家は、木屋町通りに表をもち、細長く、奥へへびていた。玄関横の砂利を敷いた庭を右にみて、中庭から、たたきの通庭を抜けると、裏にかなり大きな泉水のある庭が造ってある。庭を取りまくようにして、母家から廊下が通じていて、離れ二階へわたるようになっているが、土蔵を改造して、客間になっている二階の窓をあけ放つと、鴨川がひと目にみえた。鴨は高瀬川のようなひき川ではないから、川原もひろく、向う土堤まではかかなり遠いのである。宮川町から、南座裏のにぎやかな対岸の町屋根が、五月は乳いろにかすんで一望にみわたせる

のであるが、いつてみれば、旅館業かもしくは、割烹店くわいどうでもひらくには、うってつけの位置にあったといえた。由枝が妹の露子にのせられて、この家を根拠地にして、何か商売でもしてみたいと、しきりにお兼を口説きはじめたのも、理由があつたといえる。

「お母ちゃん。考えてもみんか。四条からこっちの新しいバアやおでん屋さんを覗いてみるとな、どこもみんな小っちゃいえ。三坪か四坪たらずのせまいとこで、商売してはるわ。こんな大きな家を、大戸しめて放つたらかしくのン勿体ないやないか」

なるほど、勿体ないかもしれない。しかし、お兼は、そんなことを高台寺の坂巻に相談など出来たものではないと思つていた。娘たちは若くて向うみずだからそんなことをいうが、家だけあつても、うちには女しかないない。娘たちが、どれだけ気負つても、商売はまた別だと思つていた。それに、この家は、坂巻が苦勞した金で買ったもので、お兼と一しょに住んだ家でもある。今でこそ籍も切れた他人といえるけれども、娘たちにしてみれば、うまれた家である。別れる時に、この家もろともすっぱり呉れていった坂巻の見切りのよさに、お兼は、正直のところ、見直す気もちもなつたのだが、その家を改築して、商売をするとなると、当然、坂巻に相談してみなければならぬことだと考へていた。お兼

が、それをタテに、娘たちの思案に反対すると、

「阿呆やな、お母ちゃん。いつまで、お母ちゃんは、貧乏して暮すつもりやのん。お父ちゃんかて、この家呉れはつたんは、お腹はらんなかでは、うちらアが大きいうなつたら、なんぞ、そんなことでもするやろ思うて、ほいと呉れてゆかはつたんやないかいな。お母ちゃんの考へは古いわ。古い古い家を、このまま、くさらしてしめて……好きな芝居もみんと、旅行もせんと……じつとこのまま、死んでしまふのんかいな……お母ちゃん」

由枝とちがつて、露子のいうことには針がある。顔つきも、坂巻ゆずりの眼のほそい丸顔をしてゐる由枝とちがつて、妹の方は、顎が張つていて、気性が強い。

「なア、姉ちゃん」

露子はいうのだ。

「うちはおでん屋よりもバアがおもろい思うねん。表の半分を改造してな。洋風のスタンドにして……高級酒しかおかへんねん。かわいいバーテンさんひとり置いて、お姉ちゃんとうちがお店へ出て……品のよいお客さんを片っ端から籠絡ろうらくしてやんのやな。そんなん、面白いやないか、お姉ちゃん」

由枝は苦笑してきいてゐる。どちらかというと、姉の考へにはお兼も同意したくなるような地についたしつかりしたものがあつた。由枝は同志社大学の家政科にいた

ころ、同じ大学の男の子と恋愛沙汰を起して、まだ、坂巻がこの家にいたころではあるが、女あそびのはげしい父に反抗して、家出した経験がある。一年半ばかり、山科のアパートで、その男と同棲していた。影山という相手の学生は、卒業してから、働くでもなく一日ぶらぶらして、由枝を働かせた。影山は一日じゅう、小説本などよみふけている男で由枝は愛想がつきた。そのうちに子を妊なごつた。家出して一年目にいまのみどりを生んだのである。子がうまれると、少しはしっかりしてくれると思つたのに、影山は臍へそ技わざけの甲斐性あひせいなしで、理屈りくつはいうが生活力はなく、肺病にかかつて、岩倉の病院へ入院してしまつた。そうしてぶつくり音沙汰を絶つた。由枝にアパートのことは委して、離別状態になつたのである。当時、お兼は坂巻と別れる別れないでいざこざがつづいていて、とても、由枝の方に手がまわらなかつたのだが、坂巻が高台寺に移り住むようになると、すぐに由枝をよびよせることにした。初孫の顔がみたかつたせいもあるが、馴なれないバアづとめをして子を育てている由枝がふびんに思われたからで、お兼は、由枝を影山からひきとる決心をした。赤ん坊のみどりは、今日で満四歳になるが、三年間、由枝は高辻のこの家から蛭薬師むしやくしのバアに通い、もう影山のことは忘れていた。籍は入ってゐなかつたから、軀からださえきてしまえば、正式に別れたと見

なしてもよかつたわけで、この点、娘の場合は自分の場合と違っていると、お兼は思つたものだった。それから、三年たつた今日、お兼も由枝も、病氣一つせずすくすく育つみどりを見守りながら、岩倉の病院へいったあと、影山の消息は知らないのである。

妹の露子は、そのあいだに、短期大学の保育科を出ていた。この春、卒業したのだが、友だちがみな市内や郊外の幼稚園へ就職してゆくはなしはするけれども、自分のこととなると、どんなもくろみがあるのか、働く気ぶりはなく、就職のはなしなどひとことも口にしない。

お兼は、困つた娘たちだと歎いていた。しかし、この春の露子の卒業で、ようやく重荷をおろした気もちになつてもいた。短大だけは出してやりたい。それだけ教育さえしておけば、あとは、自分自分の才量で、生きてゆくだろうと目安をたてたのである。けれども、露子はどう考えているのか、卒業して今日で二月月になるけれどぶらぶら何もせずに家にいるのだった。

「お母ちゃんかてな。そんなに、いつまでもお金はずづかへんえ。お父ちゃんから月々おくつてくれはるお金で知れたもんやしな。それに、お父ちゃんは、露子が卒業するまでちゆう約束で、月々三万円送つてきてくれてはつたのを、この四月で、二万円に値下げしてしまわはつた。二万円何が出けるや、露ちゃん。お母ちゃんの食

扶持<sup>ぶち</sup>だけやろ。あんたもしっかりしてもらわんとあかんがな」

「せやさかい、お母ちゃん、うちがいうてんのやないかいな。幼稚園へつとめたかて、月八千円やろ。初任給八千円で、洋服一着買<sup>か</sup>うたら、それでおしまいやな。朝八時に起きて、おつとめして、一日じゆう、園児のおしつこのあと始末してやでエ……えらい目エして八千円。そんなん、今どき、阿呆<sup>あほう</sup>らして働<sup>はたら</sup>けへんね。よっぽど、お姉ちゃんみたいに、バアへいった方がええ思うねん」

と露子はいう。由枝はそばで片えくぼのできる丸顔<sup>まるがお</sup>を苦笑させ、みどりのスカートのほつれを繕<sup>つくろ</sup>っている。

「お母ちゃんは、お父ちゃんに、義理<sup>ぎり</sup>だてして、月々の送金を有り<sup>あ</sup>り<sup>あ</sup>り<sup>あ</sup>がたがって<sup>あ</sup>はるけど、そんなん、お母ちゃん、卑屈<sup>ひくつ</sup>すぎる思うなア。考えてみんか。お父ちゃんは、お母ちゃんを振<sup>は</sup>らはったんやろ。お母ちゃんが年よりにな<sup>な</sup>ったんで、若い恋人と一しよに暮<sup>く</sup>しとうな<sup>な</sup>ったさかいに、別れよ思<sup>おも</sup>わ<sup>わ</sup>は<sup>は</sup>ったんやないか。狡<sup>ず</sup>るいんや。世間では、いくら年よりのお母ちゃんかて、大事<sup>だいじ</sup>にしてはる旦那<sup>だんな</sup>さんがい<sup>い</sup>っぱいやはるやろ。うちらが小<sup>こ</sup>っちゃい時から、女<sup>め</sup>あそび<sup>あそ</sup>び<sup>あ</sup>ばかりしてたお父ちゃんが、五十をすぎたお母ちゃんをかな<sup>か</sup>な<sup>か</sup>な<sup>か</sup>し<sup>し</sup>ませて、あげくのはてに、子<sup>こ</sup>お<sup>お</sup>がもう一人前<sup>ひとまへ</sup>にな<sup>な</sup>ったさかいいうて別<sup>わか</sup>れてもええやろか、そんなん、虫<sup>むし</sup>がよすぎる思うんやねん。お母ちゃん

んを不幸<sup>ふこう</sup>にしてしもたんやさかい、何<sup>なに</sup>ぼでも、そのつぐないにお金をしぼり取<sup>と</sup>った<sup>と</sup>た<sup>た</sup>が<sup>が</sup>ええのんえ……お母ちゃん。三万円<sup>さんまねん</sup>づつ送<sup>おく</sup>って<sup>て</sup>く<sup>く</sup>れて<sup>て</sup>は<sup>は</sup>った<sup>た</sup>んを……二万円<sup>にまんねん</sup>にへらさは<sup>は</sup>った<sup>た</sup>んて……お父<sup>ちち</sup>ちゃん、ち<sup>ち</sup>や<sup>や</sup>つ<sup>つ</sup>かり<sup>り</sup>して<sup>て</sup>るわ。うちが卒業<sup>そつぎやく</sup>した<sup>た</sup>んで、そ<sup>そ</sup>ん<sup>ん</sup>だ<sup>だ</sup>け、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の罪<sup>つみ</sup>がへ<sup>へ</sup>つ<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>思<sup>おも</sup>う<sup>う</sup>て<sup>て</sup>は<sup>は</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>や<sup>や</sup>ろ<sup>か</sup>……お母<sup>め</sup>ちゃん、弱<sup>じやく</sup>腰<sup>こし</sup>にな<sup>な</sup>った<sup>ら</sup>あかんえ。お父<sup>ちち</sup>ちゃんて、狡<sup>ず</sup>るい<sup>い</sup>ん<sup>ん</sup>や<sup>や</sup>さ<sup>さ</sup>か<sup>か</sup>い……」

いまにも高台寺<sup>こうたいじ</sup>の家<sup>いへ</sup>へど<sup>ど</sup>なり<sup>り</sup>こ<sup>こ</sup>み<sup>み</sup>に<sup>に</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>き<sup>き</sup>そ<sup>そ</sup>う<sup>う</sup>な<sup>な</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>う<sup>う</sup>露<sup>ろ</sup>子<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>劍<sup>けん</sup>幕<sup>まく</sup>に、お兼<sup>かね</sup>は小<sup>こ</sup>敷<sup>しき</sup>の<sup>の</sup>よ<sup>よ</sup>つ<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>眼<sup>まなこ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>そ<sup>そ</sup>う<sup>う</sup>し<sup>し</sup>よ<sup>よ</sup>ぼ<sup>ぼ</sup>つ<sup>つ</sup>か<sup>か</sup>せ<sup>せ</sup>て<sup>て</sup>困<sup>こま</sup>つ<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>顔<sup>かほ</sup>にな<sup>な</sup>る<sup>る</sup>が、こ<sup>こ</sup>ん<sup>ん</sup>な<sup>な</sup>ふ<sup>ふ</sup>う<sup>う</sup>に<sup>に</sup>い<sup>い</sup>い<sup>い</sup>か<sup>か</sup>え<sup>え</sup>した。

「そ<sup>そ</sup>う<sup>う</sup>い<sup>い</sup>う<sup>う</sup>け<sup>け</sup>ど<sup>ど</sup>え、露<sup>ろ</sup>子<sup>こ</sup>ちゃん。お父<sup>ちち</sup>ちゃん<sup>か</sup>て<sup>て</sup>し<sup>し</sup>ん<sup>ん</sup>ど<sup>ど</sup>い<sup>い</sup>ん<sup>ん</sup>え。六<sup>む</sup>十<sup>じゅう</sup>にな<sup>な</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>か<sup>か</sup>ら、あ<sup>あ</sup>ん<sup>ん</sup>な<sup>な</sup>若<sup>わ</sup>い<sup>い</sup>嫁<sup>よめ</sup>さん<sup>と</sup>、そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>人<sup>ひと</sup>の<sup>の</sup>親<sup>おや</sup>御<sup>おん</sup>さん<sup>の</sup>面<sup>めん</sup>倒<sup>たう</sup>み<sup>て</sup>は<sup>は</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>や。こ<sup>こ</sup>れ<sup>れ</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>面<sup>めん</sup>倒<sup>たう</sup>み<sup>て</sup>生<sup>せい</sup>き<sup>ん</sup>なら<sup>ら</sup>ん。商<sup>しょう</sup>売<sup>ばい</sup>の方<sup>かた</sup>か<sup>て</sup>、こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>ご<sup>ご</sup>ろ<sup>ろ</sup>あ<sup>あ</sup>ん<sup>ん</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>う<sup>う</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>エ<sup>え</sup>へ<sup>へ</sup>ん<sup>ん</sup>そ<sup>そ</sup>う<sup>う</sup>や<sup>や</sup>し<sup>し</sup>な……事<sup>じ</sup>情<sup>じやう</sup>は<sup>は</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>え……露<sup>ろ</sup>子<sup>こ</sup>ちゃん」

「阿<sup>あ</sup>呆<sup>ほう</sup>や<sup>や</sup>な<sup>な</sup>ア、お母<sup>め</sup>ちゃん。お母<sup>め</sup>ちゃん<sup>は</sup>ど<sup>ど</sup>こ<sup>こ</sup>ま<sup>ま</sup>で<sup>で</sup>人<sup>ひと</sup>が<sup>が</sup>え<sup>え</sup>え<sup>え</sup>の<sup>の</sup>ん<sup>ん</sup>や。お母<sup>め</sup>ちゃん<sup>は</sup>、子<sup>こ</sup>供<sup>ご</sup>と<sup>と</sup>一<sup>いっ</sup>し<sup>し</sup>よ<sup>よ</sup>に<sup>に</sup>捨<sup>す</sup>て<sup>て</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>て<sup>て</sup>ン<sup>ん</sup>や<sup>や</sup>で<sup>で</sup>エ。そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>お父<sup>ちち</sup>ちゃん<sup>に</sup>、新<sup>あたら</sup>しい<sup>い</sup>恋<sup>こい</sup>人<sup>びと</sup>が<sup>が</sup>出<sup>で</sup>来<sup>き</sup>て<sup>て</sup>、そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>恋<sup>こい</sup>人<sup>びと</sup>と<sup>と</sup>一<sup>いっ</sup>し<sup>し</sup>よ<sup>よ</sup>く<sup>く</sup>た<sup>た</sup>に、あ<sup>あ</sup>た<sup>た</sup>し<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>に<sup>に</sup>は<sup>は</sup>関<sup>かん</sup>係<sup>けい</sup>も<sup>も</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>年<sup>とし</sup>よ<sup>より</sup>り<sup>り</sup>の人<sup>ひと</sup>ま<sup>ま</sup>で<sup>で</sup>ひ<sup>ひ</sup>き<sup>き</sup>う<sup>う</sup>け<sup>け</sup>て、……そ<sup>そ</sup>ら、お父<sup>ちち</sup>ちゃん<sup>の</sup>自<sup>じ</sup>業<sup>ぎやう</sup>自<sup>じ</sup>得<sup>とく</sup>や<sup>や</sup>な。六<sup>む</sup>十<sup>じゅう</sup>にな<sup>な</sup>つ<sup>つ</sup>て、苦<sup>く</sup>勞<sup>らう</sup>して<sup>て</sup>は<sup>は</sup>る<sup>る</sup>の<sup>の</sup>ン<sup>ん</sup>も、み<sup>み</sup>ん<sup>ん</sup>な、お

父ちゃんの業ごうやないか。そんなお父ちゃんのエゴイズムの犠牲になって……うちらまでが生活に苦しむのなんかまっ平や。うち、お父ちゃんのところへどなりこみにいったるわ」

露子の剣幕はあらい。今日に限ったことではない。坂巻のことが話題になると、露子はもつとも鼻柱つよく戦闘的になる。お兼は、露子にどれだけ口汚なくのしられても、だまつているしかないのであった。同じことは、由枝にもいえたかもしれない。由枝は由枝で父親の不しだらを、つかのまの同棲しかなかったにしても、軀が弱くて入院したまま消息を絶った男の姿にかさねてみるのであろうか。男のふしだら話が出てくると、由枝はいつも口づくむのである。どちらかというところ、気性はお兼に似ている。おっとりしている。やさしい気心をもっているのだが、男にしてみれば好きな一面といえても、何につけても控えめで、気弱すぎるようなところのあるふだんの行動は、お兼や露子だけでなくも由枝のつとめている蝟薬師のバア「ルニー」の同僚も歯がゆい思いをすることが多い。

姉が二十四、妹が二十一。それに四歳のみどりを入れて、お兼の家は女ばかりの世帯である。外へ出て働くのは由枝だけである。妹と母とのはげしいやりとりをききながら、由枝は由枝で、バアとまでゆかなくても、ゆ

くゆくは、お茶漬屋でもはじめねばならないと考えていた。みどりの将来のことを考えてくると、どうしてもそれは必要なことでもある。いつまでも、高台寺の父にしがみついているわけにもゆかない。いま、母は健在だけれども、五年もすれば五十になる。病気になったらどうするか。勝気な露子がいるから、バアをひらいてもやうってゆけないということはないだろうが、それはいまのところ不可能に近い。古い家の表を改築して、洋風のバアをひらくのには、少なくとも三百万円はかかる。いったい、この金はどこから出るのか。母に貯蓄のないことは知っていたし、いくら露子がバア開店を主張しても、それは夢のようなはなしなのであった。資本のいらぬお茶漬屋なら、表のみせの間の床を落として、タタキにしなおし、周囲の壁にいま風の模造紙でも貼ればどうやら見られるものは出来るだろう。入口が格子でいまのままの数寄屋すきや風にも見えるのも、かえって、お茶漬屋としては雰囲気があるとも思う。しかし、これにだって百万円はいる。いったい、この金はどこからひねりだせばいいか。由枝の地について考えたというのは、結局、自分のあいだ「ルニー」で働いて、日々のチップや、週給の金を積みたてる以外にはないということなのであった。由枝は山科のアパートで、持ち物も衣類も、いっさい影山のために失くしていたから、三年目の今日になって、ま

だ三十万そこそこの金しかたまっていない。お茶漬屋をひらくにしても、まだ日は遠いと思う。

「露ちゃん、あんたのいうことはようわかるわ。せやけどな。バアをひらくちゆうたかて、先だつもンがお金やろ、それがいいことにはあかんのえ。せやさかい、うち、お母ちゃんにいつもいうてんのやけどな、うちが、これから働くお金をためて……三年ほどすると、どうやら、百万円できる、そのお金で小さいお茶漬屋でもした方がええ思うねん」

「お茶漬屋か？」

と、露子は失望したような声をだした。四角い顔をむけて姉をみた。

「あんなもん、零細な儲けしかないえ、お姉ちゃん。はじめから、どんとバアひらいた方がええ思うわ」

「お姉ちゃんかて、バアの方がええ思うえ。せやけど、どないするん、そのお金……」

「あたしが働く。あたしをバアへ出してエな。やがては経営せんならん身イやさかい勉強するつもりで、うちもつとめに出してエな。ほしたら、うちかて、貯金するわな。お姉ちゃんひとりにたよったら、いつのことやらわからへんし……な、お母ちゃん。うちつとめに出してエな」

露子の本音はそこにあつたといえよう。大学を出して

もらつても、幼稚園などへつとめる気がしないというのも、そこに魂胆があつてのことであつた。お兼は由枝と顔を見あわせて、吐息をついた。押しまくられるような気もして、露子の顔をみているしかないのであつた。ところがその露子が、一日友だちのところへゆくといつて出た日に、夕刻になつて帰ってきたが、ちょうど蛸薬師へつとめに出る由枝と木屋町の四条を下つたところで鉢合わせした。露子はこういつた。

「姉ちゃん、うち、あしたから、つとめるえ」

由枝はどきりとして露子のはしゃいだ顔をみた。

「あんな、お姉ちゃん。四条のな、木屋町上つたところにカエデゆうバアがあるやろ。わりと大きなバアやのん。そこへ面接にいったらな、いっぺんで傭つてくれはつたわ。あしたから、うちいくいうて約束してきたンや」

姉はあきれた。眼をみひらいて妹をみつめた。

「びっくりしてんのかいな。お姉ちゃん。すまんけどな。あしたから、お姉ちゃんの、ワンピース一枚貸して……ええな」

露子は有頂点でいつた。「楓」というバアは、毎日歩いて通う木屋町の右側にあるのは知つていた。裏口が高瀬川に面していて、大きなネオンの看板を出している。そのあたりは、軒なみバアである。その中でも、川にせりだした一枚ガラスの窓のある広いロビーが気が利いて

いる。昼間はカーテンをひらいて掃除しているのをよくみかけることがあるので由枝も内部の模様は想像できたのだった。

「へえ、あんた、楓はんへいって来たん」と由枝はいった。

「ええバアやったえ。ボックスにすわるとな、高瀬川がすぐそこに見えてるんやな。水の流れてんのみて、お客さんが呑んでる、イキな店やでエ、お姉ちゃん」

露子はホステスに向いているのかもしれないと由枝はこの時思った。自分などよりも、明るくて、外向性があるし、気性も強い。めったに男にだまされるようなことでもないであろう。男にだまされるといふよりも、男を手にとつてあしらうようなところもみえぬでもない。由枝はそんなことを思いつついった。

「露ちゃん。お母ちゃんにうまいこといわんとあかんえ、お母ちゃんかて、あんたをバアづとめさそ思うて、大学出さはったンやないさかいな。かなしまはるさかい、あんじょういわんとあかんえ。今晚、姉ちゃん帰つたらな、うまいこというたげるさかい……ええか」

「うん、サンキュー」

と露子はいって、ハンドバッグをふりまわして走りだした。由枝はうしろ姿を見送りながら、新しい妹のバアの生活がはじまることへの不安をおぼえた。胸さわぎが

した。この不安は、由枝の心にはっきりと芯をもって生じたものではなかった。ただ漠然といつものくせで不安がただけにすぎない。姉は内気で小心者なのである。

## 2

由枝がバアのつとめを終えて帰ってくるのは、たいがい十二時から一時前後のあいだであるが、その時刻はまだ、兼子は眼をあけて待っている。奥座敷の炬燵に足を入れ、そろそろ小さくなりはじめている子供ふとんをわきに敷いて、みどりを寝かせたよこで添寝したまま、うとうとしているのが習慣だけれども、兼子の眼はその夜は十二時になると急に冴えてきていた。いつもなら、離れの部屋にとじこもっているはずの露子が帰っていないか、つた理由にもよるが、夕方由枝がつとめる前まで話しあつたことが、頭の中にしこりになって残っていたからだ。

正直なところ、由枝や露子が坂巻に反抗してゆく理由も、兼子ははっきりわかっていた。とくに由枝は、兼子に似て内気で人前ではあまり物もいわない性格にみえるけれども、あれでもなかなかの情熱家だと考えている。学校卒業間際に、影山に走り、山科で同棲した一事をみてもそれはわかる。そのころからつとめに出た「ルニ」でも、いまはもう古参株の仲間に入るまで辛抱してきている。芯がつよくなければ出来ることではない。同



じ強さは、露子の場合には表面に出ているだけで、兼子は二人の娘の性格は、やはり一脈の血をひいていと合点する。ところで、その娘たちの血はいつたい、高台寺の坂巻のものなのか、それとも、自分のものなのかと自問してみるに、どちらも坂巻の血が濃いように思われた。由枝も露子も五尺四寸はある。女としては大きい方だ、といって、そんなに大女だという印象はうけないのだがこの点も、背の高かった坂巻の血だと思ふ。兼子は娘じぶんにか背丈をはかったことはないが、五尺二寸ぐらいしかない。容貌の点はどうかというに、露子の方は顔だけ母親似で、口もとの小さくて上くちびるが少しめくれあがつたようにみえるのも兼子そっくりである。しかし坂巻のつり上った眼をうけて、眉がうすく、厚いくちびるを心もちつき出したような顔をして物をいう由枝は、ふっと、坂巻を思いださせるに充分であった。

それほどもでに血をうけて延び育ってきた娘たちを振り捨ててまで、若い女に走った坂巻という男はいつたいどんな性根をしていたのかと兼子は男の執念をみるようにも思うのだが、じつは兼子にだけ坂巻の離反していった理由は、わかっていた。

兼子はむかし、宮川町で芸妓をしていて、当時、新興映画の京都撮影所の小道具の主任をしていた坂巻と知りあった。坂巻が最初の妻と別れ、荒れていた時である。

神経質そうな彫りのふかい鼻高の顔に魅かれ、夜おそくまではなしていると、顔に似あわず、坂巻はお人好しでもあることがわかった。それにやさしい心のもち主のようにも思えて、兼子は自分で花代を立て替えて、ロケ先まで追いかけてゆくほど惚れこんだ。知り合つて二年目に結婚している。二十一のときだから、もう二十五年も前になる。昭和十二年というと、まだ世の中は太平で、活動写真の景気もよかつたころのはなしである。坂巻はちやうど三十だつた。翌年に由枝がうまれた。四年おいて、露子がうまれたが、この露子のうまれたころから、そろそろ坂巻の本性が出はじめたといえたかもしれない。主任から課長となり、新興映画を辞める戦争末期まで、坂巻勇という名前は映画の字幕にまで出たものだが、終戦を契機に坂巻は、独立して撮影道具の貸元のような会社をおこした。社長の椅子にすわつた。新興映画だけでなく、新しく松竹や日活や、東映などにも道具を貸す販路をひろめたわけである。この商売は當つた。月給をもらつていた当時にくらべると、相当のひらきが出る。木屋町高辻のこの家も二十二年に買い取つたものである。ところが、家を買つたころから、家を留守にするようになった。高台寺におさまっている戸畑光子は、もと新興撮影所の大部屋で少女役をやつていた娘である。この娘が戦後千本あたりのバアに出つたのを坂巻が見